

この小説が姉以外の目に触れませんように。

首なし姫を見た。

その噂が広まったのは、短い春休みが終わって、新学期が始まって、あとはそう、僕の姉が事故で死んだということが各教室の朝礼で伝えられてからだった。

首なし姫はこの高校からすぐ近くにあるアヤメ川公園に現れるらしい。

アヤメ川公園は林を流れる細長い川に沿って作られた全長1 kmちょっとの遊歩道じみた公園で、いつも日の光が当たらず薄暗く葉も土も空気も湿っている。その為、平日はおろか土日さえも幼稚園や小学校の行事等でしか人が訪れない場所だった。つまりはこういった噂話の舞台にはうってつけだったのだろう。噂はすぐに校内に広まり、首なし姫のエピソードは瞬く間に追加されていった。

曰く、純白のドレスを身に纏い、無くした首を求め下流から上流へとさまよっている。

曰く、夜になると無い首が痛み、激痛にのたうち回っている。

曰く、首を切った相手に復讐すべく、鋸を手に公園内のどこかの木の陰に隠れている。

「という訳なんだけど、こんなに簡単に会えるとは思わなかったよ」

首なし姫は喋れない。

『しかしひどい言われようね。ていうかわたしからすれば、そんな怪しい噂を聞いてすぐに会いに来るあんたになにより驚くわ』

なので、代わりにスマホが振動した。

『あんたもLINE使ってよ。アプリ入れてるくらいなんだから使えるでしょ』

「LINEってというかフリック入力苦手なんだよ。ダウンロードして以来使ってない。自分の親指を信用できないんだ。ってこれ、前も言わなかったっけ」

僕が答えている間にも姉はどんどん文字を生産していく。

『聞いたことに対して文字を打つのはすごいストレス』

『何それ、聞いた覚えがないわ』

『聞いても覚えてなさそうだけど』

『そうだ、あんた充電器持ってない？わたしのスマホ残り何パーセント？』

『あーもう。シュークリーム食べたい気がしてきた』

ぽんぽん飛んでくる姉からのメッセージの後半は無視する。

「そもそも怪しい噂って。自分のことでしょ」

『む』

「最初是一年の誰だかが見たらしいよ。この公園のどっかの茂みで白いドレスを着た首なし死体がのたうち回ってるところ。もうさ、恥ずかしいからやめてよそういうの」

『恥ずかしいってあんた』

姉が、なんていうんだろう、漫画的表現の怒りマークみたいのを連打してくる。

「だって姉さんが死んだこのタイミングで首なし姫なんて出ちゃったら、そりゃ首なし姫と関連付けようとする人が出てくるわけだよ。知らない上級生に訊かれたんだよ、ねえねえ、首なし姫ってもしかして君のお姉さんなのって。まあ実際そうだったんだけど」

『なにさ、わたしだってなにも好きでのたうち回ってたわけじゃないわよ。目が見えなくて、そんで地面はぬかるんでるでしょ』

またも怒りマーク。スマホの振動は止まらない。

『起きては転び起きては転びしてただけ』

『ああもう、思い出すだけで腹立つわ』

『って誰が首なし死体よ』

「いや姉さんでしょ」

視界の端で動き続ける姉の親指をぼんやり見ながら、僕は何か違和感を覚えそしてすぐにその正体に思い至った。

「姉さん、こんなにおしゃべりだったっけ」

『あら十五年の付き合いの姉に向かってそれ？姉さん悲しい』

『確かにわたしほとんど喋らなかったけど、文字にすると饒舌なのよ』

『まああんたは知る由もないけどね』

「そりゃ知らなかった」

特にそれ以上言及する気にもなれず、立ち止まり姉の方を向く。

『あんまじろじろ見ないでよ』

「なんで分かるのさ」

『分かるわよ、姉だもの』

手を離し、少しだけ後ずさる。姉の左手が僕の右手を探して空をきる。それは前に何か

のミュージックビデオで見た怪しげな振り付けみたいだった。ややあって姉は諦めたように動きを止めたので、僕は改めて彼女の姿を見る。

真っ白だったドレスはほとんど茶色に染まっていて、そこから伸びる病的に青白い手足ももちろん泥だらけ。首から上は最初からそうだったかのように何もなく、切断面にはきれいな皮膚が肩のそれと同じくらいの張力でしっかりと貼られていた。

しかしまあ、頭部がないという普段見慣れないそのバランスがどうにも気持ち悪い。立ちくらみのような感覚を覚え視線を姉の足元にやると、あることに気が付いた。

「あのさあ……自分裸足じゃん」

ついつい呆れたような口調になってしまう。

『うるさい』

「うるさいって……」

『ドレスは買えたけど靴にまで頭がまわらなかったのよ』

ばかだなあ、と言おうとして止めた。このドレスを買うために、何年も前から姉が小遣いを貯めていたことを思い出したからだ。この歳なら欲しいであろう様々なものを我慢して。

コンビニすらないこんな田舎ではアルバイト先も少なく、姉は友人のツテを辿っては繁忙期の農家や旅館の手伝いをしていた。年賀状の配送も。そっちの方が時給が良いからと、仕分けでなく配送を選んだのだ。正月の姉は、服も肌も真っ白にして嬉しそうに帰ってきた。

「まあいいけどさ。ガラス片とか踏まないでよ」

『予備の靴とかないの？』

「そこまで準備よくないよ」

前へと進む姉のつま先の動きが少しだけ慎重になったような気がした。

「そうそう、訊きたいことは色々あるんだけど」

この時点でLINEの画面では姉が何か入力していることを表示していた。

「姉さんさ、何で生きてるの」

『だよね』

即座に届いたメッセージには笑顔で親指を立てているイラストが添付されていた。

僕と姉はあたかもそれが自然であるかのように再び手を繋いで歩き始めた。

アヤメ川公園に響くのはときたま吹く風と、遠くから聞こえる鳥の鳴き声と、葉の擦れ

る乾いた音。それから僕と姉が歩く度に鳴る、ぬかるんだ土が空気を含んだときの『ぶちゅり』という不快な音だけだった。

「ねえ、死んでるってどんな気持ち？」

『ん？』

『んー、そうね』

『全然分かんない』

『そもそも死んでるって自覚あんまないしね』

『首が無いから、目が見えなくて、歩きにくくて、』

『それだけ』

『ねえ、いる？』

「いるよ、手を繋いでるだろ」

右手に力を入れる。姉の手が冷たいのはまだ寒い春先に長く外にいたからだろうか。それとも死んでいるからだろうか。鼻の奥がしん、と痛んだ。

「もいっこ質問いいかな」

『どんとこい』

「なんでドレス着てるの」

何故ドレスを着て死んでいるのかという意味じゃない。僕が訊きたかったのは何故死んだ日にドレスを着たか、ということだった。

姉の歩みが止まる。

『あー、、、』

繋がれている姉の左手がぐっぱーぐっぱーするようにニギニギと動き、反対の手は首の上、かつて唇があった場所を擦るように動いた。僕は知っている。これは姉が照れているときにする仕草だ。姉が高校三年生になって僕が高校一年生になって、それから見る事のなくなった仕草だ。

「いや、言いたくなかったらあれだけどさ。姉さんがそれ着てるの初めて見たから」

『変かな』

僕は明らかに動揺していた。

「変、じゃないけど、ちょっとびっくりしただけ」

何か言い訳みたいになってしまったと思いつつ隣を見てみると、姉は親指をせわしなく動かし書いては消してを繰り返しているようだった。

『やっぱ』

『やっぱやめとくわ』

「ん、おっけ」

なるべくいつも通りの声を出した。そしたら心までいつも通りに戻った。

川沿いにおんぼろ水車が見えてきた。水車はギイギイと耳に障る音をたて僕と姉を歓迎していた。

「彼びっぴのこと？」

『なんで蒸し返すのさ』

「僕でさ……」

『ん？？？』

飲み込んだはずの言葉は喉を這いあがるようにして僕の口からゆっくりと出てきた。

「僕で良ければ殺そうか？ 彼びっぴ」

我ながら狡い性格だなと思った。自分がしたいことすら他人を理由にしないと言えないなんて。醜い。そう思った。

顔のない姉の表情は読み取れず、僕は姉の親指の動きが止まるのを待った。

『あー』

『別に』

『死んではほしくはないかな〜』

スマホに表示されたその文字を見て、僕は姉に気付かれないように落胆した。緑と茶色と黒だった視界は、いつの間にか黒が多くなってきていた。

『そうそう、こっちからもいっこ質問』

「なにさ」

姉はたぶん、話題を逸らそうとしたのだと思った。

『なんでわたし、あんたの声が聞こえてるの？』

「え？」

『最初さ』

『最初っていうのは死んで、生きて、最初』

『何も聞こえなかったんだ』

『ザーっていうノイズみたいのが遠くから聞こえるだけで』

僕は答えない。姉の親指は動き続ける。

『でもさ、さっき』

『こうやってあんたが来てからは耳が聞こえるし』

『まあ音は遠いけど。あと匂いも少し。森と水の匂い』

『なんだろうね。電話の親機と子機みたいなものなのかな』

『わたしとあんた』

僕は笑った。顔の筋肉の動きの音が姉に聴こえないよう、無音で笑った。

そんないいもんじゃなよ、言いかけてやめた。だって、僕が姉の首を持ってるというだけなんだから。押入れから引っ張りだした僕のリュックの中に姉の首が入っているというだけなんだから。

だけど僕はそのことも姉に伝えず「そういうもんかもね」とだけ言った。

「なんだかんだ姉弟だからね」とも。

僕は自分に言い聞かせるようにそう続けたけど、姉の親指は動かなかった。

少しだけ間があった。

「あ、見て見て、あの木の上にリス」

驚いた僕がそう言うと、すぐさまスマホが振動した。

『ほんとバカなんじゃないのあんた。見えないの!』

「あ、そっか。ごめんごめん」

普通に申し訳なくなり謝るけど、姉はそんなに怒っている風には見えなかった。本当のところは知らないけど。

「もうすぐ公園が終わるよ」

木で出来た小さな橋を渡る為、姉をエスコートしながらそう言った。

「どうしようか」

『あんた何しに来たのよ』

しかし、文字だけというのは本当に相手の気持ちが分からないものだ。

「どうしたいの？」

だから僕はそう姉に訊いた。

『どうって、そりゃ』

「そりゃ？」

首を見付け元の場所に戻し何もなかったみたいに暮らしたいのだろうか。

それともこのまま首なし姫として公園をさまよい続けたいのだろうか。

他には。他には、どうすれば姉が幸せに存在していけるのだろうか。

僕と姉は無言のまま歩き続け、公園の終わり、一般道へと繋がる低い登り階段を前にしていた。

「小説になりたかった」

「小説？」

立ち止まろうとする僕の手を離し、姉はまるで目が見えてるみたいに川へ入っていった。

姉さん、と呼び止めようとしたところで久し振りに姉の声を聞いたことに気が付き僕は動けなくなった。声は、リュックの中から聞こえた。

細長い公園と十字にぶつかる砂利道の下、山へと向かっているであろうトンネルに姉はザブザブと川を遡り進んでいく。もう半分くらい見えなくなっていた。僕はどうしてか急いでリュックの中から姉の首を取り出し、トンネルの暗がりに向けてボーリングの要領で放り込んだ。

姉さん、無くなった首痛くないのかなと見当違いのことを考えているうちにとうとう姉は見えなくなった。後を追う気にはなれなかった。僕はいつも持ち歩いている鎮痛剤を握りしめ、立ち尽くしていた。風もなく、視界で動いているのは木の上のリスだけだった。

いつの間にか首なし姫の噂話は僕の耳に入らなくなってしまった。学校みんなは次の噂話を追いかけるのに忙しいのだろう。無趣味だった僕は、たまに一人で隣駅のボーリング場に行くようになり両親をひどく驚かせた。

一度だけ、姉の元彼ぴっぴにボーリング場で会った。向こうは僕の顔なんか知らない。だから僕はいつでもそれを相手の顔面に叩きこめるように持ちながら彼に声を掛けた。

「ボーリング上手なんですね、得意なんですか？」

彼のスコアは僕よりひどいものだった。彼は突然知らない男に声を掛けられたことに驚いているようだったが困ったような笑顔で答えてくれた。

「いや、なんでか突然始めてみたくなっちゃって」

僕は適当に返事をして自分のレーンに戻り、あの日の姉の首の感触を思い出しながらボールを放った。スプリットだった。

それから少しして、姉が最期に言った言葉を思い出した。少し迷ったけど僕はあの日のことを小説に書いてみた。小説は、読んだことはあったものの書くとなると勝手が分から

ず我ながらずいぶんヘタクソなものになった。タイトルは最後まで思い付かなかったので
適当につけた。読んでほしい相手は姉しかいなかった。どうすれば姉が読めるかと考えた
が、多分姉がいるところに一番近いであろうところに置いておくことにした。

姉さん、読み終わったらLINE下さい

/ 終 / 伊藤なむあひ